



あきらめずに希望を作っていこう！

すべてに勢いを感じさせる夏になりました。平素は聖母の小さな学校の教育に格別のご理解、ご協力をいただき、深く感謝申し上げます。本校も、本日、1学期の終業式をいたします。5名の生徒、6名の相談生を中心に教育にあたりました。

不登校という、すぐには解決できない事態に、解決という結果を求めず、結果に向かう日々のプロセスを丁寧に歩むことは、本当に難しいです。「他の子どもは進路を決めた。うちの子どもは朝起きられない。ゲームばかりしている。昼夜逆転の生活。普通とはどんどんかけ離れていく」「意を決して高校を受験し、合格し、入学した。入学式は行けたけど、その後は、中学時と同じ昼夜逆転の生活しかできない。7月に入り、出席日数不足で留年または退学になった。どうしたらいいか、わからない。子どもは何も変わらない」。私たち大人は、どうすればすぐが変わってくれるだろうかと思ってしまいます。親は、今をどうしていいかわからないけれど、とにかく、元のように学校に行けるようになって欲しい…これだけを思ってしまいます。学校に行けることが唯一の解決で、それが実現すれば、すべて解決したと思いがちです。本当は、そうではありません。また、周りの大人以上に、当の子どもは苦しんでいます。困っています。今、昼夜逆転のこんな生活しかできないこと、ゲームが唯一、気が休まる相手であること、人と話もしない生活、同年代とどんどん離れていく自分の将来はどうなるのか…など、子どもが困っていることに丁寧に目を向けて、すぐには解決できないけれど、今、子どもが困っている思いや考えを知る。子ども自身、自分が何に困っているのか分からないほど混乱しているかもわかりません。考えもまとめられないかもわかりません。感情も出せないかもわかりません。そうであれば、言葉になる以前の事として、子どもの息遣いが感じられる程近くにいて、共に息をするところから始めるより仕方がない。共に息をすれば、子どもの喘ぎが伝わる。その喘ぎによって、子どもの絶望感を受け止めてやれるかもしれない。受け止めてくれる人がいれば、子どもは生きていける。その喘ぎを受け止める日々こそ、解決に向かう日々、プロセスなのです。苦しいけれど、当人はもっと苦しい。あきらめず、日々、そこにある小さな明かりをつかみながら、歩みたいものです。一人で、とか、家族だけで、と考えてはいけません。そんなに簡単なものではありません。力を合わせていきたいと思えます。

この1学期は、保護者や原籍校と、この絶望感を共有しながら、小さな希望を作っていた学期でした。この困難を通して改めて人間として成長できるよう来学期も努めます。よろしく願いいたします。今学期も多くの先生方にお世話になりました。感謝申し上げます。

<今学期お世話になった先生方>

音楽 (北浦 弘治 先生)	体育 (渡邊 弘 先生)
華道 (山中 知昌 先生)	数学 (江宮 文夫 先生)
校外学習 (山下 正 先生)	



7/5 梅干し作り (赤紫蘇塩揉み)